

巴

觀世小次郎作

季は地は後前  
シテワキシテワキ  
正月近江里女旅僧  
巴前に同じ

「行けば深山もあさまよい。く。木曾路の旅に出でうよ。

詞 「是は木曾の山家より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち都に上り候。

道行 「旅衣。木曾の御坂を遙々と。く。思ひ立つ日も美濃尾張。定めぬ宿の暮ごとに。夜を重ねつゝ日を添へて。行けば程なく近江路や。鳩の海とは是かとよ。く。

詞 「急ぎ候ふ程に。江州栗津の原とやらんに着きて候。此所に暫く休らはゞやと思ひ候。

シテサシ 「おもしろや鳩の浦波しづかなる。栗津の原の松陰に。神を祝ふや政事。實に神感も頼もしや。

ワキ詞 「不思議やな是なる女性の神に参り。涙を流し給ふ事。返すぐも不審にこそ候へ。

シテ 「御僧は自らが事を仰せ候ふか。

ワキ 「さん候神に参り涙を流し給ふ事を不審申して候。

シテ

「おろかと不審し給ふや。伝へ聞く行教和尚は。宇佐八幡に詣で給ひ一首の歌に曰く。何事のおはしますとは知らねども。

詞  
「忝なさに涙こぼるゝと。かやうに詠じ給ひしかば。

神もあはれとや思しめされけん。御衣の袂に御影をうつし。それより都男山に誓ひを示し給ひ。国土安全を守り給ふ。おろかと不審し給ふぞや。

ワキ  
「やさしやな女性なれども此里の。都に近き住居と

て。名にし負ひたるやさしさよ。

シテ詞

「さてく御僧の住み給ふ。在所は何処の国やらん。  
是は信濃の国木曽の山家の者にて候。

ワキ

シテ  
「木曽の山家人ならば。栗津が原の神の御名を。問はずは如何で知り給ふべき。是こそ御身の住み給ふ。木曽義仲の御在所。同じく神と祝はれ給ふ。拝み給へや旅人よ。

ワキ  
「不思議やさては義仲の。神とあらはれ此所に。い

まし給ふは有難さよと。神前に向ひ手を合はせ。

地

「古への。是こそ君よ名は今も。／＼。有明月の義

仲の。仏と現じ神となり。世を守り給へる。誓ひ

ぞ有難かりける。旅人も一樹の陰。他生の縁とお

ぼしめし。此松が根に旅居し。夜もすがら経を読

誦して。五衰をなぐさめ給ふべし。有難き值遇か

な。実に有難き值偶かな。さる程に。暮れて行

く日も山の端に。入相の鐘の音の。浦わの波に響

きつゝ。いづれも物すごきをりふしに。我も亡者の來りたり。其名をいづれとも。知らずは此里人に。問はせ給へと夕暮の。草のはつかに入りにけり。／＼。（中入）

ワキ歌

「露をかたしく草枕。／＼。日も暮れ夜にもなりしかば。粟津が原のあはれ世の。亡き影いざや弔はん。／＼。

後ジテ

「落花空しきを知る。流水心なうしておのづから。

澄める心はたらちねの。

地「罪も報いも因果の苦しみ。今は浮まん御法の功力に。草木国土も成仏なれば。況んや生ある直道の弔ひ。彼是いづれも頼もしや。頼もしやあら有難や。

ワキ「不思議やな栗津が原の草枕を。見れば有りつる女性なるが。甲冑を帶する不思議さよ。

シテ詞「なかくに巴と言ひし女武者。女とて御最期に。

召し具せざりし其恨み。

ワキ「執心のこつて今までも。

シテ「君辺に仕へ申せども。

ワキ「恨みはなほも。

シテ「荒磯海の。

地「栗津の汀にて。波の討死すゑまでも。御供申すべかりしを。女とて御最期に。捨てられ参らせし恨めしや。身は恩のため。命は義による理。誰か白

真弓取の身の。 最期に臨んで。 功名を惜しまぬ者  
やある。

クセ 「さても義仲の。 信濃を出させ給ひしは。 五万余  
騎の御勢。 鐣をならべ攻め上る。 磯波山や俱利伽  
羅。 志保の合戦に於ても。 分捕高名の其数。 誰に  
面を越され。 誰におとる振舞の。 なき世よのがたりに。  
名ををし思ふ心かな。

シテ 「されども時刻の到来。

地 「運槐弓の引く方も。 渚に寄する栗津野の。 草の露  
霜と消え給ふ。 所はこゝぞ御僧達。 同所の人なれ  
ば。 順縁に弔はせ給へや。

シテ 「さて此原の合戦にて。 討たれ給ひし義仲の。 最期  
を語りおはしませ。

シテ 「頃は正月の空なれば。

地 「雪はむら消えに残るを。 たゞ通路と汀をさして。  
駒をしるべに落ち給ふが。 薄氷の深田に駆け込み。

弓手も馬手も鐙は沈んで。下り立たん便りもなくて。手綱にすがつて鞭を打てども。引く方も渚の浜なり。前後を忘じて扣へ給へり。こは如何にあさましや。かゝりし処に。自ら駆けよせて見奉れば。重手は負ひ給ひぬ。乗替に召させ参らせ。此松原に御供し。はや御自害候へ。巴も共と申せば。其時義仲の仰せには。汝は女なり。忍ぶ便りも有るべし。是なる守小袖を。木曽に届けよ此旨を。

地「かくて御前を立ち上り。見れば敵の大勢。あれは巴か女武者。余すな漏らすなど。敵手繁くかゝれば。今は引くとも遁るまじ。いで一軍うれしやと。巴少しも騒がず。わざと敵を近くなさんと。長刀引きそばめ。少し恐るゝけしきなれば。敵は得

り。

たりと切つて懸かれ。長刀柄ながくおつ取りの  
べ。四方を払ふ八方払ひ。一所に当るを木の葉  
返し。嵐も落つるや花の滝波。枕をたゝんで戦ひ  
ければ。皆一方に切り立てられて。跡も遙に見え  
ざりけり。く。

シテ  
「今は是までなりと。

地  
「立ち帰り我君を。見奉れば痛はしや。はや御自害  
候ひて。此松が根に伏し給ひ。御枕のほどに御小

袖。肌の守を置き給ふを。巴なくく賜はりて。

死骸に御暇申しつつ。行けども悲しや行きやらぬ。

君の名残を如何にせん。とは思へどもくれぐの。

御遺言の悲しさに。栗津の汀に立ち寄り。上帶切

り。物の具心静に脱ぎ置き。梨打烏帽子同じく。

かしこに脱ぎ捨て。御小袖を引きかづき。其際ま

での佩添の。小太刀を衣に引きかくし。処はこゝ

ぞ近江なる。信楽笠を木曾の里に。涙と巴はたゞ

ひとり。落ち行きしうしろめたさの。執心を弔ひ  
て給び給へ。  
く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第二輯」大和田建樹著